日本近代礼法の形成過程

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者名</th>
<th>薄井 明</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>北海道医療大学看護福祉学部紀要</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2005年</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00006698/">http://id.nii.ac.jp/1145/00006698/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
抄録：本論文では、前号に引き続き、風俗習慣、学校教育、近代天皇制、および礼法書を検討しながら、『日本近代礼法』の形成過程を略述する。第3節の（2）では、明治三十年代半ばから明治末期にかけての『日本近代礼法』の形成過程を論じる。この時期、特に日露戦争後の社会のアノミー化に対して、文部省は、天皇制教育における学校儀式を再編し、作法教授要項を作成・発表した。一方、国民の間にも「国民作法」制定を希望する声があった。この結果、書名に「国民作法」を掲げる礼法書が数多く出版されたが、そこには「臣民」重視のものと「市民」重視のものとが混在していた。そして、「礼節」だけでなく「礼交」を扱う作法書も徐々に増え、そのなかから洗練された合理主義的な礼法理論を展開する作法書も現れた。

キーワード：日本近代礼法、風俗習慣、学校教育、近代天皇制、礼法書

＜論文＞

『日本近代礼法』の形成過程(3)

薄井 明

目次

1. はじめに
2. 明治前半期の『日本近代礼法』の形成過程
   [以上前々号]
3. 明治後半期の『日本近代礼法』の形成過程
   (1) 近代化主義への全面的な反動と学校儀式礼法の成立
      [以上前号、以下本号]
   (2) 「作法教授要項」の制定と「国民礼法」の要請
3. 明治後半期の『日本近代礼法』の形成過程
   (2) 「作法教授要項」の制定と「国民礼法」の要請
   『日本近代礼法』形成過程の第四期は、世紀の変わり目である明治三十三年（1900）前後から始まり明治末期に一つの頂点に達する「社会的変化の影響」（筒井 1995：5）とそれがその体調の引続期の時期に対応する。近現代国家制度の骨格が完成し、日清戦争により日露戦争を「勝利」で終え、悲願の不平等条約改正も最終段階に入り、国際的な地歩を築き進めていた当時の日本だが、社会内部では、近代国家完成後最初の「重大な機能不全」（橋川 2001：248）に陥りつつあった。こうした状況のなかで叫ばれた「国民礼法」制定とは、体制の危機に対する建て直し策の一つであったといえる。これ以降、「国民礼法」問題は、体制が危機に陥るたち国民統合策の重要な一環に位置づけられていくことになるが、その初発となるこの第四期を、(a) 日露戦争後の社会のアノミー化と国家による引き締め、(b) 天皇・皇室に対する礼法の強化とその効果、(c)「作法教授要項」の制定の前後、(d) 出版された礼法書の特徴の各面から見てみよう。

(a) この時期の日本は、近代国家としての諸制度が整い、対外的地位が上昇していったのは裏腹に、国家の求心力は弱まりつつあった。「富国強兵」という国家目標と「立身出世」という個人目標がほんと整合的に連携されていた明治半期とは異なり、明治前半になると「日本の強力である立身出世主義に隣りが見え始め」（筒井 1995：4）、個人が国家に属・外感を抱き始め、こうした傾向が顕著化するが、日露戦争の「戦後」であっただけに、明治二十年頃から育ちはじめた個人の意識と明治政府のめざしとした国民の意識」（関川 2003：201）は、日露戦争の戦勝ムードで一時的重なり合ったが、「一等国」になるという国家目標を達成してしまった後、両者の乖離が重畳することになる。この国家目標の達成＝消失という状況を、山崎正は的確にこう表現している。

「日露戦争の終わりとともにまさに明治維新が終わったのであり、それに同時に国民の目から白い「坂の上の雲」が消えて行った」（中略）いわば、国家が国民の感情を煽動する力を失い、それにつれて国民ひとりひとりが、自分を一体化し得る中心的な感情を失うことになった」（山崎 1986：109-110）

北海道医療大学看護福祉学部紀要 No.12 2005年 —1—
すでに「日露戦争をへて日本は産業革命を突入し、世界・物質・競争・拝金・功利などの風潮が社会においてかぶさろうとして」（鹿野 1990：113）といった、日露戦争後の「規範喪失（anomie）」状況が加わり、とりわけ青年像は大きく変容していた。天下国家を論じ立身出世を志す従来型の青年は姿を消し、代わりに出現したのは、金持ちになることを追求する「成功」青年、詩人の叙情に傾倒する「堕落」青年、宗教・道徳・哲学的な問題に悩む「閉鎖」青年などであった（筒井 1995：5－6）。これらの青年像は一見異なるが、前の世代との断絶という点で共通していた。例えば田山花袋は、明治四十年（1907）発表の小説「葉樹」で主人公の中年男に「青年はまた青年で、恋を説くにや、文学を読ずるにも、政治を論じるも、その態度が著しく変えて、自分とは永年に相違すること出来ないように感じられた」（田山 2002：8）と語っている。そして、彼ら「戦後」世代に蔓延していたシステムについて、夏目漱石三十九年（1906）の「断片」で次のように書き記している。

「現代の青年に理想なし。過去に理想なく、現在に理想なし。家庭にあっては父母を理想とする能わず」。学校にあっては教師を理想とする能わず。社会にあっては紳士を理想とする能わず。実事上それらは理想なきなり。父母を軽蔑し、教師を軽蔑し、先輩を軽蔑し、紳士を軽蔑す」（三好 1986：320）

また、増加する女学生や都市の富裕層に目を軽らば、経済発展に伴う大衆社会的な状況は、日露戦争後にえるという強まり、「駄慢客様」浮薄軽蔑」「堕落」等と指摘される傾向が日立てる。例えば明治三十年代後半には、「女学生の堕落」をめぐる言説が新聞・雑誌・書籍を賑わした。また、次に引用する、四十四年（1898）の流行語「ハイカラ」の一節を読めば、当時世相が想像できるだろう。「ゴールド眼鏡の ハイカラは都の東の目白台 女子大学の 女学生 片手にバ イロン ゲーテの詩 口には唱える 自然主義 早稲田の稲穂が サーラサラ 魔風恋風 そよぜよぜ。」

その一方で、資本主義の進展は、都市への人口集中に伴う生活環境の悪化や貧民街の出現、賃金で労働条件で働く男女労働者の増加、足尾銅鉱事件をはじめとする公害の発生など、様々な社会問題を生み出した。これら問題を背景に社会運動・労働運動が組織され、それに伴い「社会主義」思想が浸透していた。片山涉らが日本初の社会主義政党「社会民主党」を結成し、即「治安警察法」違反で活動禁止になった明治三十四年（1901）には、日本最初のメディアといわれる労働者大懇親会が開かれ、「社会主義」が流行語になった。その後、三十五～六年的「普選」運動の高揚と直後の分

裂、三十六年秋から約一年間、社会主義の立場から「反戦平和」を唱えた「平民新聞」など、運動の消長を経て、日露戦争後を迎える。そして、三十九年（1906）は「社会主義運動と争議の年だった」（関川 2003：212）といわれるほど運動が高揚し、翌年（1907）には「教育界の危機」と題して「社会主義教育家」が新聞紙上で槍玉に挙げられたりしている（「読売新聞」明治四十一年六月五日）。

以上の事態を総括すれば、日露戦争前後に「明治国家」とその周辺の価値規範が吸収できない志向や呪詛が社会に頭を置いて来ていた（「竹山 1996：280」ということ。そして、それらが、日露戦争後は、政府が危険視する諸勢力へと成長していったということである。日比谷焼打ち事件（1905）のように暴徒化する「大衆」もそうだが、政治における「社会主義」と文学における「自然主義」が最も警戒すべき大勢力であった。

こうした勢力の浸透に危機感を抱いた政府は、それらの封じ込めと排除に乗り出した。その一環として、まず、学生社會における「風紀顧問」「危険思想」の取締りに着手し、明治三十九年（1906）五月、牧野伸弥が文部省訓令を発した。そのなかで、青年・女子の「風紀顧問」を戒めるとともに、「極端なる社会主義」を「危険思想」と定義して、その未然防止を要請している（「官報」明治三十九年六月九日）。さらに、四十四年（1908）十月、「教育時論」（第四五号）に掲載された「学界問題に関する文部省注意書」では、「学校職員の感化尚専心なる者」と評価し、雑誌における「鬱権の言論」や「堅忍なる思想を破壊する傾向のあるもの」の排除などを再度訴えている。

こうした風紀の振翼を全国民に広げて、「勤労」「華を去り実に就き」等を要請したものが、明治四十四年（1908）十月に発布された「戊申詔書」である。だが、「教育二関スル勧誘」に次ぐ重要な勧誘とされる「戊申詔書」に関しては、多くの論者がその内容の偏重と影響力の弱さを指摘している（橋川 2001：239－240）。

「詔書が出されたという意味だけしか持っていなかっ

た。国民全族の意識がこの種の詔書で変るというわけのものでもなかった」（村上・坂田 1955：640）

翌年（1909）九月に文部省が改めて「文部省直轄諸学校における修身教育の件」を出し、修身教育の重視、教育勧誘・戊申詔書の趣旨の徹底を訓令しなければならないことに、この詔書の影響力の実に表れている。

この点では、明治三十五年（1905）末に夏目漱石が書いた、天皇制に関する「予言」をめいた「断片」が「的中」したように思われる。

「〇昔は御上の御威光なら何でも出来た世の中なり。
〇今は御上の御威光でも出来ぬことは出来ぬ世の中
なり。

次には御上の御威光だから出来ぬという時代が来るべし。」（三好 1866年317 [編者、一部原著者]

しかし、そうであればこそ、支配層の側は、躍起になって天皇制を強化し、反国家的勢力を駆逐しようとし
た。この攻防が一つのピークに達するが、明治三十七年（1910）五月末の宮下太吉の逮捕から始まる「大逆
事件」であった。一九二四年度アップ事件とされる本件で、幸徳秋水らによる天皇暗殺計画という「大逆」を捏
造してまで社会主義無政府主義を弾圧しなければならないほど、支配層の危機感は強くともいえる。

（b）時代を少しだけ前に戻そう。天皇制に関しては、日清戦争（1894－95）の勝利によって「大元帥」たる天
皇の権威は大きく高まったといわれる。そして、日清戦
争後、「家族国家論」等と呼ばれる「家秩序に擬した天
皇統治の正当性論」（鈴木 1993：99）が盛んに論じら
れ、天皇制の「支配の正当性」に根拠が与えられていっ
た。

これに呼応するように、天皇制教育における学校儀式
も再編されていく。学校での家祭の儀式に関しては、すでに明治二十四年（1881）六月の「小学校校祭
大祭儀規則」で式次第が規定され、二十七年八月に
は「祝日大祭歌词集図譜」で儀式用歌唱として「君が
代」と「勤労奉公歌」など八編が選定されている。これらの規
則が三十九年（1900）八月の「小学校令施行規則」にお
いて、学校儀式を行う家祭の儀式は「君が代」と「勤労
奉公歌」などの歌唱が選定されている。これらの規
則に従い、小学校の祝日

儀式は、職員・児童による「君が代」の合唱、同「勤
労奉公歌」の最敬礼、学校長による教育教諭の奉弔、教育
教諭に関する訓釈、学校長部にふさわしい歌唱の合唱
という式次が正規のものとなった（文部省 1972b：
105）。

しかし、この規則にもかかわらず、地域間や学校間で
儀式にばらつきが見られるよう、四十三年（1910）に、
帝国教育会が、三大節をはじめとする儀式の統一的な式
次を決議している。それによると、三大節の式次は、
（一）敬礼、（二）学校長御歌の歌を聞く、（三）敬

禮、（四）最敬礼、（五）勤労奉公、（六）歌唱、敬

侓奉答、（七）学校長訓示、（八）歌唱（その祝詞に相当する歌）、（九）学校長御歌の歌を聞く、（十）敬礼」（『昭和
新聞』明治四十三年九月二十一日）となっている。

これら一連の改編は学校儀式の一元化または標準化で
あり、規程上は、天皇・皇室に対する儀式礼法の細分化
や厳格化はみられない。だが、前号で述べたように、二
十年代、三十年代には、文部省や内務省により、天皇・
皇后像の「聖像」化と教育教諭の「聖典化」が進めら
れ、四十年（1907）四月公布の改正「刑法」では、
「不敬罪」の範囲が「皇太子」から「皇太子または皇太
孫」へ、「皇族」から「神宮または皇宮」へと拡大されて
ていた。一方、二十四年（1891）で50.3%だった学童児
童就学率は、三十三年（1900）に81.5%へ、さらに四十
年（1910）に98.1%へと急上昇している（文部省 1972
a：321）。つまり、皇室神秘化が進むなか、儀式礼法の
教育対象となる学童が急増したわけであり、その意味で、
天皇制教育における儀式礼法の本格的な普及の時期だっ
たといえる。そうした文脈においてみると、帝国教育会
による学校儀式統一の提案（1910）は、単なる整理などで
はなく、日露戦争後の天皇制強化策に呼応する動きだっ
たことがわかる。

これらの学校儀式礼法をベースにしながら、他の場面
でも天皇・皇室に対する礼法が新たに編纂・整備されて
いた。その一つが「行幸啓」に対する学生生徒の敬礼
規程である。まず、明治三十八年（1905）、「学生生徒の
敬礼の仕方に関する、初めての統一な規程」（原 2001：
150）とされる文部省内閣内閣「天皇陛下内閣東宮行幸
ノ際奉進ノ学生生徒敬礼方」が出された。この段階で
れば、例えば武装親衛していない生徒で帽子を被っている
者を脱帽を要するものの、姿勢としては「不動直立」を
要求するだけの簡略な規定であった（次の引用文[A])。
それが、四十三年（1910）八月の文部省調令「行幸啓ノ
節学生・生徒敬礼方」では、具体的な数値を含んだ細か
な敬礼方法に変わっている（次の引用文[B]）。
（A）「二 帽子を被る生徒
御車の前列を通過する際一斉に脱帽して両足を挙げ姿
勢を正しく視線を御車に注ぎ不動直立すること」（佐藤
1994：126）
（B）「二 武装せざる場合（女生徒を含む
学校長及び職員は前列の右翼に指揮者を各組の右翼に位
置し前駆の見えたとき「気を付け」の口令を下し一
斉に脱帽せしめ直立不動の姿勢を取らしむ御車が組の
右翼約十歩に近いとき「礼」の口令にて敬礼せ
しめ（体の上部を約三十五度前に屈しむ）次に原の
姿勢に復せむ。／御車が組の左翼より通過するときは
学校長・職員及び指揮者は左翼に位置す」（佐藤
1996：21）

一見してわかるように、天皇に対する「表敬」様式＝
儀式の細分化・厳格化の程度は、敬礼方[A]に比べて五
年後の敬礼方[B]の方がはるかに進んでいる。また、後
者[B]（1910）では「敬礼」の角度「約三十度」が規定さ
れている。同年十月に出された「文官拝謁敬礼式」で
「敬礼」の角度が「約四十五度」と規定されており、
明治四十三年（1910）という年は、＜日本近代礼法＞史
上、「最敬礼」が敬礼（普通礼）の正式な角度が示され

北海道医療大学看護福祉学部紀要 No.12 2005年

— 3 —
た最初の年になる。この数値化によって、ばらつきがあり
った体の居方の統一がされると同時に、形式上の敬態化がつい進んでいったと考えられる。

この時期に強化された、天皇制に関するもう一つの礼法が、皇室に対する生徒児童の「敬称・敬語」使用である。天皇・皇室に対する尊称や敬語は、新聞では明治初年から使用され、学校でも以前から使われていたが、四
十三年（1910）の「小学校教科文法要項」および翌年の「師範学校・中学校教科文法要項」において、生徒児童
の日常礼法として初めて明文化された。「言語対応」の事項が「皇室に関する語句の使用に限らず敬称・敬語を用うべし」（ cumplent 1940；296）であった。これを含む「言語対応」の作法事項（特に「師範学校・中学校教科文法要項」そのもの）は「戦前の敬語の根幹をなすもの」（西田
1996；308）とされる。また、要項には「敬称・敬語」がどのように語句を指したか記されていないが、要項の解説書として後に出版された甫守謙吾「国民文法要義」では、「天皇の御乗物を車戸・車飾と称し奉るなり」と「新文法」項目が掲載されている（甫守 1916；68
70）。

このような、礼の仕方や言葉遣い方で要求された、天
皇・皇室に対する尊敬の態度は、その厳重な家団気とともに、着実に、当時の生徒児童の身分に納め込まれてい
ったと考えられる。だが、そのことからすぐに、生徒児童や国民が天皇を「神」と扱い続けていたと結論づけるとす
れば、村上信彦の「歴史についていつも起こる錯覚
」その時点と他の時点との混合（村上 1973；187「傍点
一原著者」）となってしまう。村上が自らの読み取り調
査体験からこう述べている。

「私は明治女性の聞話をあつめる際にかならずといっ
てよいほど明治天皇をどう思うかと詰め込まれて、敬
愛の心を持たないと答えたものは一人もいなかった
のと同時に、神だと信じているものも一人もいなかった
」（村上 1973；187）

また、四十五年（1912）六月十日の「日記」のなかで夏
目漱石は、天皇・皇室に対する礼法の強化過程を、冷静
に、次のように評価している。

「（四）帝国の臣民陛下殿下を口にすれば馬鹿吐きで
言葉遣いですれば清ると考えます。真の敬意の意に至っ
てはかえって解せざるに似たり。（中略）／（五）皇室
は神の集合に関らず、近づきやすく親しやすくして
もうの同情に訴えて敬愛の心を得られるべき。それが一
番堅固な方法で、それが一番長持つ方法で。／政
府及び宮内官庁の進口ともすなわち皇室にいよいよ
重なるべき。しかし同時にいよいよ臣民のハートよ
り離れ去るべし」（三好 1986；327）

「敬愛の念」は抱いているが、「神」だとは思いてい
ない。これが明治末における（夏目漱石を含む）国民の
大半の天皇観だったようである。確かに、天皇神聖化を
推し進めていた政府によって「皇室といよいよ重
かるべし」（同上）の事態にはなっていた。だが、それは、
「不敬」いう言葉が喚起する恐怖心を背景とした、外
面的な服儀法の強制によるものであったがゆえに、国
民に「敬愛の念」を自然に抱かせる方法とはほど遠く、
皇室が「臣民のハートより離れ去るべし」（同上）の事態を
生み出す危険性をつねに内訳していたのである。

（a）前々述で述べたように、学校教育における「日常礼
法」教育は、「小學校礼式」として明治十年代半ばから
初等教育に導入された。その後、「女礼式」は女子
中等教育でも取り入れられ、女学校を中心に徐々に広が
っていた。そして、「国株保存法」が起こった二十
年頃から三十年代前半、その普及の波は大きくなり、礼
法書では坪庭善四郎「日本女礼式大全」（1897）他のペス
トセラーを生み出していった。

ただし、こうして女子中等教育にも採用された礼法教育
だが、二十八年（1895）の「高等女学校規程」で「作
法」を教授することは明記されたものの、正式の教授項
目は決めていなかった。その教授項目が初めて正式に
規定されるのは、三十六年（1903）三月に文部省が規
定した「高等女学校教授要目」においてである。

「作法は坐作・進退・授受・進退に関する事項を主と
し寝食・服装・訪問・公会・吉凶・慶弔・服儀等に関
する授受を授けべし、又教授上之注意の中に作法は古式
古礼に拘泥せず現時の衣食住の事情に適合せしめこ
とに注意し坐礼には作法の実習は簡易なる方法に依り
日常事たる事項に限るべし」（甫守 1940；262）

主たる事項は従来の「女礼式」と変わらないが、「訪
問・公会」などは、女性の行動範囲の拡大によって加え
られた、新しい事項である。また、教授要目における
ように、「坐」から「立」への生活様式の変化は「坐
礼」から「立礼」への礼法の転換をもたらしている。そ
して、全体としては簡略化という趣旨が貫かれている。

しかし、段階を経にあっても、学校教育でBot_dab1_0a026.png
能的な礼法が課せられるのは尋常さであった。確かに、規則は明治四十八年（1881）の「小学校教科書規程」で、初等教
育の「修身」において「作法を授け」（文部省 1972；83）と規定され、「作法」が男女対象の教授項目に挙げ
されていた。だが、その実施については「女礼式」教育の
ように具体的でBot_dab1_0a026.png
能的な礼法が課せられるのは尋常さであった。確かに、規則は明治四十八年（1881）の「小学校教科書規程」で、初等教
育の「修身」において「作法を授け」（文部省 1972；83）と規定され、「作法」が男女対象の教授項目に挙げ
されていた。だが、その実施については「女礼式」教育の
ように具体的でBot_dab1_0a026.png
能的な礼法が課せられるのは尋常さであった。確かに、規則は明治四十八年（1881）の「小学校教科書規程」で、初等教
育の「修身」において「作法を授け」（文部省 1972；83）と規定され、「作法」が男女対象の教授項目に挙げ
されていた。だが、その実施については「女礼式」教育の
ように具体的でBot_dab1_0a026.png
能的な礼法が課せられるのは尋常さであった。確かに、規則は明治四十八年（1881）の「小学校教科書規程」で、初等教
育の「修身」において「作法を授け」（文部省 1972；83）と規定され、「作法」が男女対象の教授項目に挙げ
されていた。だが、その実施については「女礼式」教育の
ように具体的で
判が、それに当たる。三十二年（1899）、『時事新報』に連載された福沢の『女学評論』『新女大学』では、女子の身に恥ずかしさとは異なり、男性を別扱いする、性差別的な道徳教育のあり方が徹底的に批判されている。

「女子の身に恥ずかしさとは異なり、男性を別扱いする、性差別的な道徳教育のあり方が徹底的に批判されている。

父子たる者の義務として遺されぬ役目がなされども、独り女子に限りて其教訓に重なるとは仰立論の根拠を誤りつつるものにしやうべし」（福沢 2001：20）

これに類した主張は、礼法教育の分野でも目立ってくる。「前号で指摘した、『女礼式』から男女普通礼式へ』の傾向は、明治三十年代、徐々に強まっていった。例えば、三十四年（1901）刊の山本良吉『実践倫理礼法篇』は、礼法が社会の秩序を維持し人間の感動を寄せを主とする以上、男子ともよしを守る要来を処理なし。来より現れて男女共に社会の礼法を守らざるべきかと思』（山本 1901：9 [書者：藤原覚春]）と述べている。また、三十九年（1906）の島根県師範学校附属小学校教育研究会『教育研究報第12集』の「維新論」欄には、「[作法は一引用者]これまで女子の特有物の如くなくなっていたようであるが、之は間違えて男女も同様講ずべきならぬものである」と、従来の礼法が「間違い」と断ずる発言がみえる。

一方、こうした礼法教育の変化を生き出し、より大きな背景として、道徳意識や社会規範の崩壊への危機感を感じ出すようであろう。その箇所で触れられたように、日露戦争後、『堕落』『腐化』『不良』等批判された学生・青年の行動は、男女を問わなかった。急激に『女子学生』に対する世間の風当たりは強く、三十年代半ばに至る『女子学生の堕落』をめぐる様々な意見が噴出していた。一方、男子では、従来は大半に見られてきた『軽狂』や『席讓』は、もはや見過ごせないレベルに達していた。例えば、築前県での次のように騒動が、だんだんと珍しくなくなっていったのである。

「近来学生の風紀類廃せることはごくもと同じ事ながら、本県師範生徒のごとくは殆ど検査落鄰なるべし。彼等は白昼公然料理店により、醉倒睡魔声高にストライキ節を放歌するなど、その乱状はほとんど名状すべきべし」（『時事新報』明治三十五年五月十九日）

これ以降も、似たような『乱状』は無くなるなかったようので、この記事から七年の明治四十二年（1909）九月になって、文部省から学生生徒の飲酒取締に関する訓令が出されるにいたる（文部省 1972b：636）。

こうした状況が続くなか、対象として生徒生徒も組み込んだ格格的な『礼法』『作法』教育の必要性が真剣に議論され、実施検討事項となっていた。その実質的な作業の開始時期は定かでないが、公式の検討作業が始まったのは、世間では『大逆事件』の騒ぎが起こっている真直前の明治四十三年（1910）六月であった。外界の喧嘩をよそ目に、文部省内にて設置された『作法教授事項調査委員会』（委員長：松村茂助）の第一回委員会が開かれた。同委員会は同年十月まで計二十九回開催され、十月二十一日付文部大臣・小松英太郎に報告書が提出された。そして、同年十二月二十二日、「小学校作法教授要項」が文部省白書発表された（内務 1940：264）。

また、同年（1910）十月から翌年夏まで、今度は『師範学校・中学校作法教授要項』作成のため、田所利治を委員長とする作法教授事項調査委員会が計三十九回、同整理委員会が計十回開催され（内務 1916：20 [附録の部]）、明治四十四年（1911）八月に『師範学校・中学校作法教授要項』が発表された（内務 1940：262－263）。

後の『師範学校・中学校作法教授要項』は全七章で、各章のテーマは「非常の心得」、「姿勢及び進退」、「敬礼」、「服装」「授受進退」、「招待及び応招」「食事及び歓迎」「言語対」「訪問の心得」、「授受」、「対面の心得」、「評価の心得」、「懇請の心得」「顔面の心得」「集会の心得」「通信及び文通」「祝祭日の心得」「家礼及び礼儀」であった。教授内容は『日常生活礼法』と『儀式礼法』のほとんどを網羅している。項目数も、男子学生を対象とした礼法・作法としては充分すぎるほどであった。

しかし、充実した内容の学生用作法書が用意されても、実地指導されなければ、「給に挿入した冊子」である。ては、その実施状況はどうかというと、きわめて不充分だったようだ。要項作成に参画した内務庁は、中学校での作法教授に関し、『実際その教授する学校は極めて数少であるのみならず、これを教授した学校も教授の目的に合致するような教授を施した学校は極めて少々であった』（内務 1940：263）と後に述べている。こうした事情から、中学校での作法指導の上台を作っていく『小学校作法教授要項』を参考に小学校の作法をいくつか通俗的に教授するようにとの通達が、大正二年（1913）に文部省から再度出されている（内務 1940：265）。

こうして、小学校作法教授要項および師範学校・中学校作法教授要項は、『仏前茶倉貢馬』に於ける『附要項』があった『男子の作法』（同）を『寺町・診病』（同）にすることは成功しなかったが、〈日本近代礼法〉史上、両要項の作成・発表が一つの転換点であったことは間違いない。すなわち、これらの作法教授要項が果たした直接的な役割は、『準国定の』礼法『作法』を示すことによって、国民的な礼法・作法の標準または基準を提供することにあると思われる。実際、師範学校・中学校作法教授要項の解説書や、それに準拠した教科教科書が、これ以降、何冊も出版されていった（次の (d) 参照のこと）。そして、そのもう一つの役
割は、より間接的であるが、三十年後、太平洋戦争が勃発する昭和十六年（1941）に出される「礼法要項」という「国定の礼法」の先駆けとなった点にある。

(d) 以上で概要した背景を踏まえて、この時期に出版された礼法書・作法書の特徴をまとめてみよう。

まず第一の特徴は、書名に「国民礼法」「礼制作法」を含んだ礼儀作法書の出版である。作法教授項目調査委員会の審議が始まった頃、新聞には「[議論] 礼法の一定社会の実情に合する「国民礼法」の制定を望む」「読売新聞」昭和四十三年七月二十日）の声が上がされるなど、世論とも「国民礼法」を期待していた。こうした気運は、その数年前からあった。例えば明治三十五年（1902）刊とみられる大村忠宏の『達磨僧伝』（国民作法教本）をはじめとして、四十二年（1909）に同書の改訂版『訂正国民作法教本』が、四十三年に相島亀三郎・加藤末吉『日用国民礼法』が出版されている。四十四年（1911）の『園籍学校・中学校作法教授要項』発表以後は、この要項に準拠した書物が「国民礼法」「国民作法」を名乗っていく。明治四十四年刊の松崎隆次郎『国民礼法講義』、大正五年（1916）刊の陳守謙『国民作法要義』と玉井廣平『国民作法要義』がそれに当たる。また、書名ではなく編著名に「国民礼法」を冠した国民礼法調査会編『国民礼法を中心とした礼儀作法の理論と実際』（1912）も、この作法教授要項を参照している。ちなみに、これらの代表格である陳守謙『国民作法要義』（1916）の初版は二月で、三版が同年六月に出されはじめて、売行きは好調だったようである。

このように、当時「国民礼法」「国民作法」という言葉がある程度一般化していたことは確かだが、その「国民」には二つの意味合いが混在していたと考えられる。一つは大日本帝国の「臣民（subject）」（テクノ・氏族の重視）であり、もう一つは近代社会の「市民（citizen）」（ヨコ関係・社交の重視）である。上記の本には、「臣民」の立場を先にした編修から「市民」の立場を先にした編修まで、内容的に種々のものが含まれている。前述したように、明治末期には、天皇制を強化する必要性が体制側にあり、皇位父系の時期を含めて、「臣民」強調の傾向は強まっていた。だが、そうした状況においても、近代社会の「市民」にふさわしい礼儀作法を確立するという過去は破壊されてきた流れていた。

したがって、この時期の礼法書・作法書における第二の特徴として、近代市民社会に対応した日常礼法の増加を目指すべきだろう。すなわち、日常礼法の場面設に「社交」領域が増え、その優先順位が上がってきたことである。この傾向は先の作法教授要項にもみられるが、それが顕著なのは四十三年（1911）刊の山本良吉『実際倫理礼法編』である。この本は、若干男女差別的な記述はあるものの、全体として「社交」を重視した、『市民』養成の礼法書という編修となっている。内容と構成は、「第一講 礼法／第二講 交遊／第三講 紹介／第四講 訪問／第五講 会話（以下、省略）」である。すでに三十七年（1904）から使われていた定例修身書で「家族道徳や国家に対する道徳が国定直前の検定教科書よりもいかに残し、近代市民社会の道徳の比重が高まっている」（代田生 1999：103−104）との指摘もあり、近年市民社会への対応という姿勢は、この時期の作法書に現れる一つの傾向である。例えば、佐藤高子・後藤野喜子『女子作法書』（1898）に無かった「訪問」と「談話」に関する記述が、その全面改訂版である『作法教科書』（1908）では、「訪問」は独立した「第四章」として、「談話」は「第三章 接客の心得」中の「第五 談話」として、それぞれ記載されている。「訪問の心得」が礼法書に一貫に登場するのは明治三十五～三十七年（1902−04）頃だという指摘があるが（熊倉 1999：183）、この傾向は、「訪問」を含めた「社交」領域全体に現する傾向である。

しかし、この変化には、一部で、礼法・作法に関する文化的定義の変更も伴っていた。その典型例が、「社交」の中心に位置する「談話（会話）」である。確かに、「談話（会話）」についての心得は、以前の礼法書にもあったが、『言葉は慎んで語りに出すべきならず』（国分 1895：22）といった禁令がほとんどであった。「お喋りは無駄にして悪」という儒教的発想からであろう。ただ、上述の佐藤・後藤『作法教科書』（1908）には、「談話の種類は四則の事、旅行中の事、新聞の事等、総ての人の心を楽しまむる上に注意すべし」（佐藤・後藤 1908：19）と、部分的にはあるが、「会話を楽しむ」という「社交」の発想が入っている。そして、この「社交の会話」を強調しているのが、先の山本『実際倫理礼法編』である。彼は、会合に集まる人が三人にても五人にしても、同じように面白く、又全員を面白く思いむ様に、談話するが会話の秘訣なり（山本 111: 49）と明確に述べている。こうした変化に対応して、例えば篠原忠雄『応答談話法』（1906）のように、「談話（会話）」の心得・技法を単独に扱った書物も、出現してくる。

一方、日本人の生活に入り込んできた洋式の生活様式の影響は、「衣・食・住」の変化を通して、礼法・作法にも本格的に及ぼしてきた。例えば岩瀬松子『和洋折中式案内』（1905）では、前よりのごとく、坐するは少々さよりとたりとなければ、噂を自らから立礼の式の起こりこそ、時勢に応じたものをうらべて（岩瀬 1905：44）と説かれているように、日本間から洋間への変化（著）は、日常の「敬礼」の中心を「坐礼」から「立礼」に移していっ
た。しかし、こうした変化には、礼法・作法にまつわる、もう一つの課題が付随している。すなわち、敬礼で「立礼」が敬礼として正統なのか否か等の疑問に答える課題である。岩瀬「和洋諸礼式案内」では、この問題に対して次のような反論により正当化している。

「我が邦とも、さまでて立礼の式法のあらざりしのに
あらず。途端にて行会いたるときのとき、互に其の
自分に応じて、礼式を行はは、実立礼にあらず
や」と(岩瀬 1905: 44-45)

この例に限らず、礼法・作法の不変・可変のためか、どちらにせよ、その正統化を改めて根拠づける必要性が
生じてくる。風俗習慣が大きく変化する状況のなか、取
捨選択によって一定の礼法・作法を残すにしても、新たな礼
法・作法を編み出すにも、それぞれを「規範」として提示
するためには、「礼法理論」が要請されるのである。

これが、この時期の礼法書・作法書の特徴としてみられ
る、「礼法理論」の増殖と改変という傾向である。

この点を指摘している熊倉かつによると、「③ 【明治
三十八年（1902）刊の竹冊撰書『新編今昔作法文』、一部引用者】以降、次第に強化されてくるが、礼法とは何か、という総論あるいは礼法理論である」(熊倉 1999: 207)。特に「礼法理論」が著者が高い礼法書・作法書と
して、四十四年 (1911) 刊の下田歌子の「婦人に礼法」(全
416頁の二割弱) と甫守雅音の「国民作法要義」(全304頁の
二割強) があり、ともに著者の五分の一の前後を占めてい
る (熊倉 1999: 206)。二つのうち、熊倉も注目する下
田「婦人に礼法」を取り上げてみると、その「礼の根本的
條件」の範囲で礼法・作法の適正基準を提示している。

「(イ) 最も普通なる事」「(ロ) 道徳なるべき事」

「(ハ) 衛生的なるべき事」「(ヘ) 昔の時代の思想風俗に一致
しなければならぬ」「(ホ) 経済的なるべき事」「(ヘ) 相手
に美的興味を与べき事」の四つである(下田 1911: 63
3-78)。例えば、「西洋風の授業」が日本の礼法に
ふさわしくなければ、「(ハ) 衛生的なるべき事」の基
基に反することから説明される。従来は説明抜きで「〜
すべき」「〜するのが礼である」と断定されていた礼法・作法の項目に対して、その説明がどこまで「科学的」か
は別として、可能できるような基準を立て、理論的な説
明を試みようしている点に、下田の礼法書が時代を画す
出来事( an epoch) である理由がある。

確かに、下田をはじめとする、新たな「礼法理論」の
出現は、「礼法に近代的な合理主義がもってこまれた」
(熊倉 1999: 199) 事例といえるだろう。しかし、載
表を返していうと、それは、一定の原理を立てて合理的
に説明しなければ「なぜその礼法・作法を守らなければならないのか」という人々の疑問に持ち替えられないほ
ど、礼法・作法における「伝統的支配」の正統性は揺ら
ぎ、「合理主義」が浸透していたことを示している。た
だし、それは、急速に普及していった学校教育の一の成
果であって、修身および学校儀式等を通じて天皇、皇
室に対する崇敬の念を一般市民に植え付けていく学校教育の成果と表裏の位置にあるものだといえる。そして、大正時代、高等教育機関が増設され、それらへの進学率も上昇していくことを考えれば、礼法・作法も含めた「伝統的支配」の正統性を疑う「合理主
義」は、ますます広まっていくと考えられる。しかも、
「大衆社会」化がさらに進行するなか、礼法・作法を時
代に適合させつつ、それを「規範」として提示していく
ためには、人々が納得するような原理・基準を立てなが
ら、新たな「礼法理論」を構築する試みが要請されるだ
ろう(12)。

【註】

(1) 以下本稿における史料は、読みやすさを優先する理
由から、法令名、書名などを除いて、現代の漢字表記
や仮名遣いに直し、また適宜句読点を補って引用す
る。

(2) 慶応十四年（1901）三月に出された「中学校令施行規
則」には、中学校においても「三大節」の「祝賀の式
を行うべし」との規定がある。

(3) これら「神聖化」の効果が顕著に現れたのが、明治三
十一年三月、長野県上田市の小学校校長・久米由太郎
が、学校の火災によって御真影を放つ教場の教書を焼失
した責任を取るために剖腹自決した事件であった。

(4) 「御車が組の右翼約十步に近きたるとき」の文言は明
治四十四年文部省調令第十一号を以て「御車が指揮者
の前で達したるとき」と改正された（原 2001: 192）。

(5) 「立礼」による「最敬礼」と「敬礼（普通礼）」の仕
方に関して、文官に対しては明治八年（1875）に「大
礼服着用敬礼式」で規定され、一般向けには明治十
六年（1883）に永野忠雄・小笠原清教「新撰立礼式」が
出版され、以後一般化していった。

(6) ほぼ同時期に出版された一般向けの礼法書には、最
敬礼の角度を「凡そ直角の度」（相馬・加藤 1910：
56）、「殆ど直角を為ぬほどに」（富佐美 1913: 22）と
する記述や、「敬礼（普通礼）」の角度を「凡そ四十五
度位に」（相馬・加藤 1910：55）、「六十度半の角
に」（富佐美 1913: 21）とする記述があった。

(7) この調査委員会に参画していた甫守雅音の回顧によれ
ば、明治四十三年（1910）の「小学校作法教授要項」
発布の「数年前文部省内に小学校及師範学校・中学
校の作法教授要項調査委員会を設けられ」（甫守
1940: 264）ということであるが、「数年前」が何年前
かは不明である。
(8)この主張が文部省の作法教授事項調査委員会の活動と
連動していた可能性もあるが、世論を巻き込んでいた
ことだけは確かである。

(9)入手した本の積みが欠けているため正しい版年は不明であるが、「経言」の日付は明治三十五年である。

(10)この本の「第一講 礼法」の箇所には、「かの生徒に
兵式注目如の礼を授けるが如きは、殆ど何の意ありや知
るべからず」(山本 1901:13)と、行幸啓に対する生徒
生徒教礼方を批判していると思われる記述もみえる。

(11)この時代、茶室として洋室が大衆的に普及したという
より、和室の壁の上に絹絵を敷いて、中央にテーブル
と椅子を並べて、準「洋間」に転換した例が多いよう
である (岩瀬 1905:44)。

(12)元々、本論文「(日本近代禮法)の形成過程」は明治
時代末においてお完結し、総括する予定であったが、
次の大正時代との連続性が強く意識されてきたため
に、当初の予定を変更し、総括部分の「おわりに」
は、太平洋戦争終結までを論じた後に配置する。

【引用文献】

(書名のみ挙げた明治・大正時代の礼法書は削除する)
相島亀三郎・加藤末吉 1910 『日常国民礼法』 明堂
書店。
福沢諭吉 2001 『女大学評論・新女大学』(講談社学術
文庫) 講談社。
橋川文三 2001 『橋川文三著作集 9』 筑摩書房。
原武史 2001 『可視化された帝国』 みすず書房。
仏守薄吾 1916 『国民作法要義』 金港堂書籍。
——— 1940 『現代国民礼法の常識』帝国教育会出版
版。
岩瀬松子 1905 『和洋礼式概案』 大学館。
海老鈴臣・仲新・寺崎昌男 1999 『教科書でみる近
現代日本の教育(第二版)』 東京書籍。
鹿野政直 1999 『近代日本思想案内』(岩波文庫) 岩
波書店。
関口善子 1895 『日用宝蔵寛女の業(上)』 大倉書
店。
熊倉功夫 1999 『文化としてのマナー』 岩波書店。
松永巌 1999 『世紀末の一観』 朝日新聞社。
三好行雄(編) 1986 『敬石文明論集』(岩波文庫)
岩波書店。
文部省 1972a 『学制百年史(記述編)』 帝国地方行
政学会。
——— 1972b 『学制百年史(資料編)』 帝国地方行
政学会。
村上信彦 1973 『明治女性史中卷前編』 理論社。
村上俊弘・坂田吉雄 1955 『明治文化史③』 洋々
社。
西田直敏 1998 『日本人の敬語生活史』 翔林書房。
佐藤健子・後開菊野 1898 『女子作法書 実習之部』
目黒書房・成美堂。
——— 1908 『作法教科書』 目黒書房・成美堂。
佐藤秀夫 1994 『続・現代史史料 8』 みすず書房。
佐藤秀夫 1996 『続・現代史史料 9』 みすず書房。
関川夏央 2003 『二葉亭四迷の明治四十年』(文春文
庫) 文藝春秋。
下田英子 1911 『婦人礼法』 実業之日本社。
鈴木正幸 1993 『皇室制度』(岩波新書) 岩波書店。
竹山治夫 1996 『日清・日露両戦争の時期における明
治国家と対抗価値』(井上光良他(編))「[普及版]日
本歴史大系15」山川出版社。
田山花袋 2000 『蒲図・一二卒』(岩波文庫) 岩波書
店。
筒井清俊 1995 『日本型「教養」の運命』 岩波書
店。
山本良吉(編) 1901 『実践倫理礼法編』 五車橋。
山崎正和 1986 『不機嫌の時代』(講談社学術文庫)
講談社。
The Formation of Japanese Modern Courtesy and Etiquette (3)

Akira USUI*

Abstract: In this paper, I outline the formation of Japanese modern courtesy and etiquette in the latter half of the Meiji period by examining manners and customs, school education, the modern Emperor system, and etiquette books. In Section 4, I study the formation of Japanese modern courtesy and etiquette during the period from the turn of the century to the end of the Meiji period, during which the Ministry of Education reorganized school ceremonies on national holidays, and drew out and issued the official manuals of courtesy and etiquette for students (sahou—kyouju—youkou) in order to preserve order against the anomic state of Japanese society, especially after the Russo-Japanese War, and people hoped that a "national etiquette" (kokumin—saihou) would be instituted. Many books titled "national etiquette" were published, but some of them made much of the position of a Japanese subject, and the other took account of the viewpoint of a citizen. More etiquette books had treated of sociability as well as orderliness, and a few of them developed an elaborated and rationalistic justification of changing courtesy and etiquette.

Key Words: Japanese modern courtesy and etiquette, manners and customs, school education, the modern Emperor system, etiquette books